

「～ができる」とは何か

—日本語能力試験の「Can-do」自己評価から—

ヤン・ジョンヨン

What “Can-do” means?

— A Discussion from the View Point of “Can-do”

Self-assessment of the Japanese Language Proficiency Test —

Jung-yun YANG

要 旨

近年、「日常的なあいさつと、その後の短いやりとりができる」「自分の部屋について説明することができる¹」などのCan-do（「～ができる」）によるの能力記述が教育・学習・評価の場面で教育のツールとして用いられている。一方で、これらの「～ができる」が具体的にどのような言語行動によって達成されるのかについては明確にされておらず、最低限必要となる言語行動や言語知識においても不明なままである。本稿では、日本語能力試験のCan-do自己評価をもとに、言語行動の達成のためにどのようなやりとりが必要であるかについて考察を行った。結論としては、N1～N5までのCan-doには比較的簡単に言語行動が想像できるものと、何をすれば達成されるか想像しにくいものに二分されること、また、これらのCan-doが日本語でできる必要があるのかに関する議論が必要なものがあること、さらに、下のレベル（N4、N5）と上のレベル（N1～N3）の項目が離れすぎているためそれらの橋渡しが必要であることがわかった。

キーワード：Can-do statements、日本語能力試験、言語行動の達成と過程

Summary

The competency description based on “Can-do” assessment, for example “I can give a daily life salute and then have short communication with someone” and “I can explain my room”, is commonly used as a tool of education, learning and evaluation. On the other hand, it has not

been clear what language behaviors the learners can achieve respective “can-do” levels expressions through and the minimum required language behavior and knowledge remain unknown. This paper aimed to discuss what communications are required to achieve the language behaviors based on the Can-do self assessment of the Japanese Language Proficiency Test. The conclusion shows that the Can-do assessment levels of N1 to N5 are classified two groups of which language behaviors are relatively easy to imagine and difficult to imagine how to achieve, that it is necessary to discuss if these Can-do expressions are really required for Japanese acquisition and that consideration of the language behavior processes allow the two groups of lower levels (N4 and N5) and higher levels (N1 to N3) to interact.

Key words : Can-do statements, Japanese Language Proficiency Test,
achievement of language behavior and the process

I. はじめに

本稿の目的は「Can-doの項目は具体的に何をすれば達成されたと言えるのか」、その内実を検討することである。Can-do Statements（以下、Can-do）とは、目標言語を使用し、どのような言語行動かとれるのかをリスト化したものである。TOEICやTOEFL、英検などのテストや、欧州評議会の『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（以下、CEFR）』、国際交流基金の『日本語教育スタンダード』などにおいても当該の言語能力を見る手段として利用されている。これらはCan-do形式による能力記述文を用い、言語行動が「できる」か「できない」か、「できる」とするならばどの程度であるかを示している。また、どのような条件下（話題、場面、対象、行動）でレベルの差があるかに関する記述も見られ（塩澤・石司・島田2010）、Can-doが外部評価の指標だけではなく、自己能力評価の指標としても機能しうることを示している（長沼2008）。日本語教育での応用としては、ビジネス日本語（BJT）や日本語能力試験（JLPT）もCan-doリストの開発を行っている。特に後者の日本語能力試験（国際交流基金・日本国際教育支援協会）は2010年度から新しい試験となりN1～N5のレベルを能力記述文で示し、学習者へのCan-do自己評価²を行っている。このように語彙・文型をどの程度覚えたかを測るといった従来型の学習項目の提示ではなく、「（○○語で）～ができる」というように言語使用の達成目標を言語行動に位置づけている点が評価に値する。

ただし、Can-doの能力記述が全面に押し出されていることへの懸念もある。というのも、Can-doの記述が評価の一つの指標であっても、また、学習者と教師間で共有される情報であるとしても、つまるところどこかで言語能力を身につけなくてはならない。日本語能力試験においても

「～ができる」とは何か

Can-doによる記述が試みられているということは、言語教育・学習の内容としての機能も果たすことにもなり得る。しかし、そのCan-doの記述を達成するためにどのようなことを学べばいいのかについての議論があまりなされていないように思われる。日本語教育の学習内容が語彙や文型を中心とした言語知識だけではなく、ある場面で適切な言語行動を行えるといった言語運用に変容している中、いまここでCan-doの内実を明らかにしておく必要があるのではないだろうか。

そこで本稿では、日本語能力試験のCan-do自己評価の【話す】の判定をもとに「～ができる」の内容を考察の対象とする。予想されることとして、Can-doの能力記述を保証できるような内容は明確に定められていないことと、言語行動の達成には語彙や文型以外にも、社会言語学的な能力、ストラテジー能力、談話能力、また、場面・状況の身近さ、フォーマルの度合いなど様々な要因が絡んでいると考えられる。

Ⅱ. 日本語能力試験とは

日本語能力試験のCan-do自己評価を見る前に、まずは日本語能力試験の概略についてみておきたい。日本語能力試験は1984年から開始され、受験者数は世界で77万人を超える、世界最大規模の日本語の試験³である（2009年現在）。近年は日本語能力試験の受験者の多様化に伴い受験のニーズに変化が見られてきた。日本語能力の測定のみならず、就職や昇格、資格認定などへの活用もされるようになったことをきっかけに2010年度から新しい試験を実施している。新試験の特徴は日本語の文字や語彙、文法をどれくらい知っているかだけではなく、その知識を実際のコミュニケーションで使えるかに重きを置き、「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」を測るとしている。以下の〔表1〕は（旧）日本語能力試験の認定基準⁴であるが、〔表2〕の新試験の認定基準とはその内容が大きく異なっている。

〔表1〕（旧）日本語能力試験の認定基準⁵

1級 180分400点	高度の文法・漢字（2000字程度）・語彙（1万語程度）を習得し、社会生活をするうえで必要であるとともに、大学生活における学習・研究の基礎として役立つような総合的な日本語能力（日本語を900時間程度学習したレベル）
2級 145分400点	やや高度の文法・漢字（1000字程度）・語彙（6000語程度）を習得し、一般的な事柄について、会話ができ、読み書きができる能力（日本語を600時間程度学習し、中級コースを修了したレベル）
3級 140分400点	基本的な文法・漢字（300字程度）・語彙（1500語程度）を習得し、日常生活に役立つ会話ができて、簡単な文章が読み書きできる能力（日本語を300時間程度学習し、初級日本語コースを修了したレベル）
4級 100分400点	初歩的な文法・漢字（100字程度）・語彙（800語程度）を習得し、簡単な会話ができて、平易な文または短い文章が読み書きできる能力（日本語を150時間程度学習し、初級日本語コース前半を修了したレベル）

新試験では旧試験の2級と3級の間にさらにもう一つのレベルを加え、全部で5レベル（難しいものN1～易しいものN5まで）を設けている。N4とN5は主に教室内で学ぶ基本的な日本語がどのぐらい理解できるかを、N1とN2では、現実の生活の幅広い場面での日本語がどのぐらい理解できるかを測り、N3はN1、N2とN4、N5橋渡しのレベルである。今回新しく設定されたN3は「日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる」ことが目標とされていることで、国内の生活者としての外国人のための日本語教育にも影響するのではないかと注目されている。[表2]には選択式テストの関係上「話す」と「書く」の技能は測れないが、総合的な日本語コミュニケーション能力を測る試験となっているとしている。

[表2] 新日本語能力試験の認定基準

N1	<p style="text-align: center;">幅広い場面で使われる日本語を理解することができる</p> <p>【読む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幅広い話題について書かれた新聞の論説、評論など、論理的にやや複雑な文章や抽象度の高い文章などを読んで、文章の構成や内容を理解することができる。 ・さまざまな話題の内容に深みのある読み物を読んで、話の流れや詳細な表現意図を理解することができる。 <p>【聞く】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幅広い場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる。
N2	<p style="text-align: center;">日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる</p> <p>【読む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幅広い話題について書かれた新聞や雑誌の記事・解説、平易な評論など、論旨が明快な文章を読んで文章の内容を理解することができる。 ・一般的な話題に関する読み物を読んで、話の流れや表現意図を理解することができる。 <p>【聞く】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常的な場面に加えて幅広い場面で、自然に近いスピードの、まとまりのある会話やニュースを聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係を理解したり、要旨を把握したりすることができる。
N3	<p style="text-align: center;">日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる</p> <p>【読む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常的な話題について書かれた具体的な内容を表す文章を、読んで理解することができる。 ・新聞の見出しなどから情報の概要をつかむことができる。 ・日常的な場面で目にする範囲の難易度がやや高い文章は、言い換え表現が与えられれば、要旨を理解することができる。 <p>【聞く】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常的な場面で、やや自然に近いスピードのまとまりのある会話を聞いて、話の具体的な内容を登場人物の関係などとあわせてほぼ理解できる。
N4	<p style="text-align: center;">基本的な日本語を理解することができる</p> <p>【読む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的な語彙や漢字を使って書かれた日常生活の中でも身近な話題の文章を、読んで理解することができる。 <p>【聞く】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常的な場面で、ややゆっくと話される会話であれば、内容がほぼ理解できる。

N5	<p style="text-align: center;">基本的な日本語をある程度理解することができる</p> <p>【読む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひらがなやカタカナ、日常生活で用いられる基本的な漢字で書かれた定型的な語句や文、文章を読んで理解することができる。 <p>【聞く】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室や、身の回りなど、日常生活の中でもよく出会う場面で、ゆっくり話される短い会話であれば、必要な情報を聞き取ることができる。
----	---

旧試験と新試験の大きな違いは、「出題基準」の有無と、言語知識の扱いの変化であると言える。旧試験にはどの語彙や文型が出題されるかを示す「出題基準」が存在したが、新試験となってからはそのような基準は公表されていない。日本語能力試験が「能力」を測る試験である限り、このような措置は正しいと判断される。日本語能力試験のJLPTという訳は「Japanese Language Proficiency Test」であり、「能力=proficiency（熟達）」としている。このような措置は、従来のような出題範囲の公表は言語知識をどれぐらい覚えているかの「achievement（到達）」になる可能性があるからであろう。もう一つの相違点である言語知識の扱いに関しては、旧試験が漢字の数や語彙数、学習時間を示し、言語知識の量に重きが置かれているのに対し、新試験では「～ができる」といったCan-doの能力記述文で示され、日本語を使ってできることと言語能力のレベルを結びつけている。注意すべきは、日本語能力試験のレベル認定の目安が、【読む】【聞く】という言語行動で表されていることである。表には記述されていないが、「それぞれの言語行動を実現するための、文字・語彙・文法などの言語知識も必要で、それぞれのレベルには、これらの言語行動を実現するための言語知識が必要である」としており、決して言語知識を軽視しているわけではない。

ここで指摘すべきことは、日本語能力試験がコミュニケーション能力の育成を鑑み、それと歩調を合わせるかのようにCan-do（「～ができる」）の能力記述を用いていることは非常に喜ばしいことであるが、さては、何を学習内容として扱えばいいかが少しばかり見えにくくなったのを否めない点である。それぞれのレベルには「幅広い場面」「ある程度理解」「日常的」「基本的」といった修飾語がついており、よりいっそう抽象度が増している。他のCan-doリストでも言えることであるが、「ある程度理解」できるとはどういうことか、「幅広い場面」とは何かについての定義がなされていないことが散見される。このような記述は教室活動の想定を非常に困難なものにする。それゆえに、教材に依存せざるを得ず、教員養成の側面から見ても改善が必要であると思われる。

そこで、次節では日本語能力試験が行った、本試験の受験者を対象とした自己評価を見てみたい。自己評価Can-doでは各レベルの学習者が日本語でできると思っている項目を「できる」から「できない」までの4段階で判定しており、より具体的に各レベルの内実を知るきっかけとなる可能性がある。また、本稿はあくまでCan-doに挙がっている項目の内容を検討するのが目的であるため、一部ではあるが4技能の中でも【話す】を中心に考察を行う。

Ⅲ. 日本語能力試験のCan-do自己評価

日本語能力試験の主催団体である国際交流基金と日本国際教育支援協会では、2010年（9月～12月）に当試験の受験者を対象に【読む】【書く】【聞く】【話す】の4技能別にCan-do自己評価のアンケート調査を行っている。調査実施地は日本、韓国、中国、ベトナム、マレーシア、インドで、学習者27,165人を対象に実施し、アンケートの記述文は英語、中国語、韓国語、ベトナム語の翻訳で示している⁶。自己評価での判定には「4：できる、3：難しいがなんとかできる、3：あまりできない、1：できない」の4段階で行われ、レベルごとに平均値が示されている。あくまで自己評価であるため、パフォーマンステストではないことに留意されたい。以下の[表3][表4]は【話す】技能に関するアンケート項目と判定のスコアである。

[表3] N4・N5の自己評価

◆N4・N5レベル【話す】		N4	N5
① ⁷	自分の家族や町など身近な話題について説明することができる	2.91	2.79
②	観光地などで会った人に声をかけて、簡単な会話ができる	2.93	2.71
③	自分の部屋について説明することができる ⁸	3.16	3.03
④	驚き、嬉しさなどの自分の気持ちと、その理由を簡単なことばで説明することができる	3.19	2.91
⑤	日常的なあいさつと、その後の短いやりとりができる (例：「いい天気ですね」など)	3.48	3.30
⑥	趣味や興味のあることについて、話すことができる	3.48	3.34
⑦	店、郵便局、駅などで、よく使われることば（例：「いくらですか」「○○をください」）を使って、簡単なやりとりができる	3.48	3.31
⑧	自己紹介をしたり、自分についての簡単な質問に答えたりすることができる	3.55	3.49

N4、N5のアンケート項目は上記の8つである。これらの項目が選ばれている理由についての記述はないが、自己紹介やあいさつ、買い物など日常的な場面が多いのが印象的である。これらの言語行動を日本語で行えるかについてもN4とN5の間に差が見られており、自分自身の日本語能力をペーパーテストでない形での判定においても把握されているように思われる。[表4]のN1～N3のアンケート項目には論理性や経緯、原因、丁寧さ、意見、プレゼンテーション、ディスカッションなど身近な話題というよりは客観的で、アカデミックなものが多く挙げられている。このような特徴がN4、N5に比べ難しいとされる要因になっていると解釈できるが、それは根本

「～ができる」とは何か

的な説明にはなっていない。特に、ここに挙げているリストは【話す】領域におけるものであり、海外で第二外国語として日本語に接している被験者の状況を考えるならば、生活に密着した日本語よりは、日本語そのものへの興味から、言語知識の方に接している可能性が高いように思われるため一概に判断することは困難である（国際交流基金2011）。

〔表4〕 N1・N2・N3の自己評価

◆N1・N2・N3レベル【話す】		N1	N2	N3
①	関心ある話題の議論や討論に参加して、意見を論理的に述べることができる	3.15	2.65	2.34
②	思いがけない出来事（例：事故など）の経緯と原因について説明することができる	3.27	2.73	2.40
③	相手や状況に応じて、丁寧な言い方とくだけた言い方が使い分けられる	3.28	2.88	2.75
④	最近メディアで話題になっていることについて質問したり、意見を言ったりすることができる	3.28	2.74	2.41
⑤	準備をしていれば、自分の専門の話題やよく知っている話題についてプレゼンテーションができる	3.36	2.99	2.72
⑥	使い慣れた機器（例：自分のカメラなど）の使い方を説明することができる	3.37	2.93	2.65
⑦	クラスのディスカッションで相手の意見に賛成か反対かを理由とともに述べるすることができる	3.45	3.01	2.71
⑧	アルバイトや仕事の面接で希望や経験を言うことができる（例：勤務時間、経験した仕事）	3.46	2.98	2.58
⑨	旅行中のトラブル（例：飛行機のキャンセル、ホテルの部屋の変更）にだいたい対応できる	3.54	3.09	2.82
⑩	最近見た映画や読んだ本のだいたいのストーリーを紹介することができる	3.55	3.12	2.76
⑪	旅行会社や駅で、ホテルや電車の予約をすることができる	3.57	3.17	2.85
⑫	準備をしていれば、自分の送別会などフォーマルな場で短いスピーチをすることができる	3.61	3.34	3.21
⑬	よく知っている場所の道順や乗換えについて説明することができる	3.63	3.30	3.00
⑭	友人や同僚と、旅行の計画やパーティーの準備などについて話し合うことができる	3.64	3.27	2.95
⑮	体験したこと（例：旅行、ホームステイ）とその感想について話すことができる	3.68	3.32	3.03
⑯	店で買いたいものについて質問したり、希望や条件を説明したりすることができる	3.71	3.41	3.23
⑰	電話で遅刻や欠席の連絡ができる	3.72	3.42	3.21
⑱	相手の都合を聞いて、会う日時を決めることができる	3.82	3.58	3.40
⑲	身近で日常的な話題（例：趣味、週末の予定）について会話が できる	3.82	3.58	3.35

次節では、本節で挙げているCan-doリストが具体的にどのような言語行動によって成り立っているかを具体的に見ていきたい。

IV. 「～ができる」とは：Can-doの分析

例えば、[表3] N4、N5に挙げられている「⑤日常的なあいさつと、その後の短いやりとりができる（例：「いい天気ですね」など）」が日本語でできるためには、どのようなことが話せなくてはならないのだろうか。あいさつは外国語を学ぶ際に最も接する優先順位が高く、頻度も高い項目の一つである。最も単純なやりとりとしては以下（1）のような例が考えられる。

（1）⑤日常的なあいさつと、その後の短いやりとりができる

例 A1：こんにちは。

B1：こんにちは。

しかし、「⑤日常的なあいさつと、その後の短いやりとりができる（例：「いい天気ですね」など）」には日常的なあいさつと、その後のお天気に関するなどといったやりとりも想定されている。そこで次のようなやりとりを想定してみる。

（2）⑤日常的なあいさつと、その後の短いやりとりができる

例 A1：こんにちは。

B1：こんにちは。

A2：いいお天気ですね。

B2-1：そうですね。

B2-2：そうですけど、少し寒いですね。

B2-3：そうですね。先週まであんなに寒かったのに、今日はこんなにいい天気です。着るものに悩みますね。

あいさつ後の短いやりとりは（2）のようにお天気に関する情報を話し、聞き手に対し共感を促し（A2）、促された方はそのまま頷くか（B2-1）、またそれを受けながらも否定し、別の角度からの情報を言うか（B2-2）といったことも考えられる。他にも、B2の段階で「B2-3：そうですね。先週まであんなに寒かったのに、今日はこんないい天気です。着るものに悩みますね。」などといった返しも可能となる。Can-do⑤における“短いやりとり”が単に話す長さであると解釈すれば、（1）や（2）の段階までが適切と考えられるだろう。しかし、N4、N5レベルで日常のあいさつができることが、さらに上のレベルであるN1～N3にある項目とどのような接点を

有しているか、その関連性が見られない。そのため、B2-3のような発言のレベルは測りようがない。他にも、「③自分の部屋について説明することができる」を対象にやりとりを考えると、以下の(3)のようになる。

(3) ③自分の部屋について説明することができる

- 例 A1：あなたはどんな部屋に住んでいるんですか。
B1：駅から近くて、便利です。
A2：そうですか。

(3)の会話は旧試験の4級レベル相当の語彙しか使用されていないが⁹、非常に不自然に感じられる。その理由は、一般に自分の部屋についての説明をする場面が非常に限られており、またA1質問に対して透かさずB1のような返答は普通の日常ではあまりないからである。以下の(4)は、部屋について聞く前のところから会話を開始した場合を想定したものである。

(4) ③自分の部屋について説明することができる

- 例 A1：こんにちは。
B1：こんにちは。
A2：今日も早いですね。Bさんの家はここから近いんですか。
B2：ええ、学校から歩いて5分ぐらいなんです。
A3：へえ、近くて良いですね。お一人で？
B3：はい、一人暮らしなんです。
A4：いいですね。私も一人暮らしがしたいんです。
B4：実家なんですか。一人もたまには寂しいですよ。
A5：でもうらやましいです。Bさんの部屋はどんな部屋なんですか。ワンルーム？
B5：いいえ、1LDKなんです。少し広いですけど、浴室は狭くて。
…(続く)

(4)の会話は作例であるが¹⁰、相手の部屋について聞く際に何らかのきっかけが必要であることは容易に想像できる。(4)のようなやりとりではなく、従来の日本語教材によくあるような「部屋に机があり、ベッドの隣にテレビがあり、テーブルの上には本が置いてある」といった「NにNがある」のような存在文を用いた返事を期待しているならば、それはどのようなきっかけで話されるのか考えなくてはならない。つまり、(4)のような例でいえることはそもそもそのような内容を「日本語で言える必要があるか」と、もし必要であるならば、「どのような状況や対人関係でなされるか」を考慮しなくてはならない。「部屋について説明する」のは(4)の

例のような知り合いとの交流会話の場合と、不動産で部屋探しをしているといった交渉会話の場合が考えられる。もし後者ならば、部屋探しのための条件や希望をも述べられなくてはならず、N4やN5レベルで扱えるとは考えにくい。つまり、先ほど(2)においても指摘したように、「日常的なあいさつと、その後の短いやりとりができる」ことが、その上のレベルであるN1～N3の項目とどのような関係があるのか不明である。

さらに、[表3]のN4、N5は日本語能力がまだそれほど高くないため、Can-doに挙がっている内容も命題(客観的な事実)が中心である。その中で「④驚き、嬉しさなどの自分の気持ちと、その理由を簡単なことばで説明することができる」は出来事に対し話し手の気持ちを述べるといったモダリティが含まれている。そこで、どういった言語表現で、どういった気持ちを表明するかを考えてみると「うれしい、楽しい、悲しい、おもしろい、嫌だ」などの気持ちを表す形容詞と、気持ちの理由を表すための表現「～から、～ので、～ため」などが考えられる。しかし、言語表現が想定されるとしてもどんなときに気持ちを表明するかは依然として不明で、上記での指摘と同様に、他に比べ著しく場面に具体性がない。

N4、N5とN1～N3の関連性は、教育・学習の内容や方法を考える際には非常に大事なものである。教育のあり方が「言語知識重視」から「言語運用重視」に変わりつつある中、学習内容の優先順位や難易度を規定できる有効な手段がない。ヤン(2011)では、言語行動の複雑さと当該の行動に至る過程が言語行動の難易度の指標になり得ると指摘しているが、日本語能力試験Can-do自己評価においても当主張が確認される事例がある。

[表3]の「⑥趣味や興味のあることについて、話すことができる」と「⑦店、郵便局、駅などで、よく使われることば(例:「いくらですか」「〇〇をください)」を使って、簡単なやりとりができる」は[表4]N1～N3のCan-doとの関連性が見られる。

(5) N4・N5: ⑥趣味や興味のあることについて、話すことができる

N1～N3: ⑩身近で日常的な話題(例:趣味、週末の予定)について会話ができる

(6) N4・N5: ⑦店、郵便局、駅などで、よく使われることば(「いくらですか」「〇〇をください)」を使って、簡単なやりとりができる

N1～N3: ⑭店で買いたいものについて質問したり、希望や条件を説明したりすることができる

(5)において、N4・N5とN1～N3の間に明確な差はあるのだろうか。前者は「話すことができる」、後者は「会話ができる」とあるが、モノログかダイアログかの違いを意味しているわけではないようである。(5)の⑥と⑩Can-doをより細かくみても、下のレベル⑥では、休みの日によくすること、好きな趣味などを話し、上のレベル⑩では、そのやり方や特徴などを述

「～ができる」とは何か

べ、さらには相手を誘うといったところまで拡張される可能性がある。(6)においても、下のレベルである⑦では買いたい物が決まっており、値段を聞く程度の言語行動を、上のレベルである⑥では買い物をする際に欲しい物の条件や特徴、さらにはお店に物が無い場合のやりとり（取り寄せなど）も想定可能となる。こちらに関しても上のレベルの方がより複雑で言語行動の達成まで複数の過程を要すると考えられる。

このように [表3] [表4] のN1～N5までのCan-doの中身を考察すると、比較的簡単に想像がつくものと、何をすれば達成されるか想像しにくいものに二分される。Can-doの記述は、当該の言語行動が日本語でできる必要性とその状況、また、下のレベル（N4・N5）と上のレベル（N1～N3）の関連づけを行えば、より教育・学習活動において具体性が生じ、有効利用できると考えられる。

V. まとめ

本稿では、Can-doが具体的にどのような言語行動によって達成されるのかについていくつかの例をあげ考察を行った。日本語能力試験のCan-doの分析から垣間見られたのは、Can-doの能力記述そのものを現行のまま教育・学習の内容、あるいは評価の対象として捉えにくい点である。Can-doの記述が抽象的であることと、そのために具体的な言語行為が考えにくいといった課題から、改善が必要なのは、一つ目は当該の言語行動の達成に必ず含まれる必要があることとは何かを明確にすること、二つ目は、Can-doで挙げられているものを達成する必要があるか精査する必要があること、三つ目は、下のレベルと上のレベルが有機的に結びついている必要があることの三点が挙げられる。また、日本語能力試験という性格上、より生活に近いものとアカデミックなものとの混在が見られるが、教育・学習の場においてそれらを学習者のニーズと現状に合わせて組立てられるための“考え方・方法”も必要になるだろうと考えられる。

人間の言語能力とは何かについてはそう簡単に答えが出るものではない。しかし、言語教育・学習の目標を語彙や文型をどれぐらい覚えたかではなく、何ができるようになったかといった言語行動を軸に据えて考えるのなら、そこに辿り着くまでの過程と、その過程に必ず必要な要素（語彙・文型・対人関係・談話構造など）とは何かを客観的な証拠をもとに明らかにしていく必要がある。課題達成までの過程が明らかにされれば、最終的には何を以て課題が達成されたと見なせるか、それがどの程度の達成の度合かを評価できるような観点も自ずと明らかにされるのではないだろうか。

（やん じょんよん・高崎経済大学地域政策学部非常勤講師）

(註)

- 1 日本語能力試験Can-do自己評価調査のCan-do項目である。
- 2 日本語能力試験Can-do自己評価調査プロジェクト <http://www.jlpt.jp/about/candoproject.html>
- 3 日本語能力試験JLPT <http://www.jlpt.jp/about/index.html>
- 4 (旧)日本語能力試験は昭和59年(1984年)以降、毎年12月に実施されている。試験は1～4級に別れており、それぞれ「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」の3種類の試験があった。
- 5 日本語能力試験 新旧の比較 <http://www.jlpt.jp/about/pdf/comparison01.pdf>
- 6 調査対象者中の合格者数は16,675人である。<http://www.jlpt.jp/about/pdf/gaiyou2010.pdf>
- 7 [表3][表4]の通し番号(①～)は筆者による。
- 8 ゴシック体の部分に関しては次節で述べる。
- 9 リーディングチュウ太 <http://language.tiu.ac.jp/result/jtool/8D1A6ABE.html>
- 10 実際に[表3][表4]に挙がっている項目を外国人の学習者と日本語母語話者を対象にインタビューを行っている。現在分析中であり、詳細は稿を改めて述べる。

【参考文献】

- 押尾和美・秋元美晴・武田明子・阿部洋子・高梨美穂・柳澤好昭・岩元隆一・石毛順子(2008)「新しい日本語能力試験のための語彙表作成にむけて」、『国際交流基金日本語教育紀要第4号』, p.71-86, 独立行政法人国際交流基金
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会編(2007)『日本語能力試験 出題基準』, 凡人社
- 国際交流基金(2011)「日本語学習の目的」、『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年概要』, p.8-11, 国際交流基金
- 塩澤夏季・石司えり・島田徳子(2010)「言語能力の達成度を表すCan-do記述の分析—JF Can-do作成のためのガイドライン策定に向けて—」、『国際交流基金日本語教育紀要第6号』, p.23-39, 独立行政法人国際交流基金
- 長沼君主(2008)「Can-do尺度はいかに英語教育を変革しうるか—Can-do研究の方向性—」、『ARCLE REVIEW』NO.2, p.50-77, Action Research Center for Language Education
- ヤン・ジョンヨン(2011)『標準的なカリキュラム案』における「事例」と「能力記述」について—言語構造によらない学習項目の難易度の基準作りに向けて—, 『国文学研究 第31号』, p.30-47, 群馬県立女子大学